

第2回笛吹市文化施設の在り方に関する検討委員会

議事報告

開催日時：令和6年9月30日（月） 午後7時 開会

開催場所：笛吹市役所本館 3階 301会議室

出席者：佐藤委員長、大川委員、一瀬委員、角田委員、長澤委員、秋田委員、
石倉委員、杉山委員、山寺委員、吉岡委員、須田委員、
返田委員（総合政策部長）
小澤政策課長、政策推進担当 樋川課長補佐、河西主幹、阿部副主幹、
渡邊主査、角田文化財課長

欠席者：近藤委員、山下委員、鈴木委員

傍聴人：非公開のため傍聴人なし

【進行：政策課長】

1 開会

2 委員長からの報告

第1回検討委員会については公開会議としたが、2回以降は非公開とする。理由については、事務局から説明する。

（事務局から理由を説明）

笛吹市文化施設の在り方に関する検討委員会は、文化施設における市の方向性の決定に参考となる御意見をいただくため、総合的に議論する必要があると考え、学識経験者、関係団体代表者を委員とした検討委員会を立ち上げ、それぞれの施設の役割や、将来を見据えた望ましい文化施設の在り方について、活発な御意見、御提案をいただく中で検討していくこととした。

本会議は、地方自治法第138条の4第3項の規定により設置された審議会、審査会及び調査会等の附属機関並びにこれに準ずる機関ではないため、公開は必須とされていないが、文化施設の在り方を検討するに当たり、会議の内容を包み隠さず、公開して行うことが望ましいと考え、笛吹市附属機関等の会議の公開に関する要綱を準用し、公開することとした。

しかし、関係団体を代表する委員から、会議を公開して行うことで、率直な意見を発言することが難しくなるとの意見があった。

このままでは、自由に活発な御意見、御提案をいただく中で総合的に議論するという会議の本来の趣旨に沿った公正な議事運営ができないことから、要綱第3条第2号及び第4条の規定に基づき、第2回検討委員会以降の会議は、非公開とすることとした。

3 委員長あいさつ

笛吹市の文化施設の在り方について、総合的に検討していくためには、委員の皆様が思っていることを自由に、そして活発に御論できる環境をつくることが大事である。

一方で、市民の皆様には様々な考えがあり、そのような意見も伺いつつ、しっかり議論していくことも重要と考える。

委員の皆様には、本日も忌憚ない意見をよろしくお願いする。

4 資料の修正について

資料1に沿って事務局から修正箇所を説明。

委員から異議等はなく、原案のとおり進めることとなった。

5 議事

(1)各施設の現状と課題について

事務局からの説明後、質疑応答を行った。

【質問意見等】

ア 青楓美術館

(委員)

文化施設の運営には多額の費用がかかるため、どんなに議論しても財源がなければ何も進まない。そのため、市全体の在り方を進めるに当たり、早急に意見を取りまとめるのではなく、財政面も含めて、ある程度時間をかけてじっくり検討していく必要があると思う。

(委員長)

財政の話も含め、時間をかけて議論すべきとの意見が出た。これらの意見も含め、何か質問意見等ある方はいるか。

(委員)

青楓美術館には、収蔵作品及び資料が934点あるとのことだが、収蔵庫のスペースが手狭であることが課題として挙がっている。現在、この934点の収蔵作品等は、全て収蔵庫に収蔵されているのか。

また、運営状況見ると、令和5年度に管理人賃金が減っている。その理由を教えてほしい。

(文化財課長)

収蔵作品及び資料は、全て2階の収蔵庫に収蔵してある。今後、作品を購入したり、寄贈などを受けた場合、収蔵スペースが足りなくなるため、将来的な課題として挙げたものである。

管理人の賃金については、令和5年度は再任用職員を火曜日から金曜日まで配置したため、会計年度任用職員の管理人は、土曜日等のみの出勤であった。これに伴い、その分人件費が減ったことが理由である。管理人賃金とし

ての支出はないが、再任用職員の人件費はかかっている。

(委員長)

作品等の寄贈は増えているのか。

(文化財課長)

寄贈の申出があることは聞いている。

実際に受け入れるかどうかは、現物を確認した上で判断している。

(委員)

美術館は、施設の特色を出すことが大事である。青楓美術館については、「青楓」という冠がついている以上、展示する作品は当然津田青楓作品又は関連作品に限定されるべきであり、その色を消してしまっただけでは何の意味もないと思う。

先ほど寄贈の話が出たが、寄贈を受け付ける作品は津田青楓の作品に限定しているのか。

(文化財課長)

そのとおり。

津田青楓に関する書籍や絵画等に限定している。

(委員)

例えば、山梨県立美術館ではミレー作品、島根県の足立美術館では横山大観作品など、多くの美術館は、独自の色を出し、展示に特色を持たせている。笛吹市では、今後、青楓作品を増やしていく予定なのか。

(文化財課長)

今後も青楓作品に関する寄贈の相談があった際には、都度対応していく。

(委員)

入館者数を見ると、令和5年度に入館者数が増えているが、増加理由は何か。

(文化財課長)

詳細までは把握していないが、令和5年度は新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことに伴い、観光客が増加したことが、来館者数が増えた大きな要因であると考えている。

(委員)

県外からの来館者が増えたということか。

(文化財課長)

県外、県内どちらも増加した。

(委員)

観光面からの視点で言うと、来館者がどこから来たのかというデータを取っておくと、観光振興に向けた戦略につながりやすい。今後の参考としてほしい。

(文化財課長)

貴重な意見に感謝する。現在、青楓美術館の来館者には、どこから来たのか、作品を見てどんなことを感じたのかなどのアンケートを取っている。次回以降、参考としてその辺りの資料も提示する

(委員)

入館者数については、平成 30 年度以前も令和元年度と同規模の人数であったのか。

(文化財課長)

詳細な数値までは分からないが、令和元年度と同程度の人数であったと記憶している。正確な数値は、次回以降に提示する。

(委員)

令和元年度は入館者数が約 1,000 人であったのに対し、令和 5 年度は約 2,000 人と倍増している。来館者が増えたのは何かきっかけがあるのか。

(文化財課長)

コロナ禍が明けたことに伴う観光客が増加したほか、知人からの紹介で青楓美術館を訪れる方が増えていると聞いている。次回以降、詳細な資料を提示する。

イ 八代郷土館

(委員)

入館者数を見ても分かるように、はっきりと申し上げて、八代郷土館はほとんど活用されていない。活用しようがないというのが実情である。

例えば展示一つとっても、民具等をただ詰め込んでいるだけで、来館者の動線は全く考えられておらず、展示するレベルになっていない。これをきちんと展示するのであれば、もっと展示数を限定するとともに、見やすく広いスペースを確保することや、きちんと展示品を説明できる者を配置することが必要である。また、施設が老朽化していることなど、言い出せばきりがな

いほど課題が多い施設である。

さらに、民具の使い方を知っている人が少なくなっている。他の自治体には、民俗資料をしっかりと展示している施設もある。そのような施設に行けば、民具の正しい使い方を学ぶことができる。しかし、民具の正しい知識を持った方々も高齢となっている。だからこそ今が大事であると以前申し上げた。

(委員)

先ほど石和町立図書館で歴史民俗資料展示室が設けられたとの説明があったが、八代郷土館の民具とは別に収蔵、展示されているということか。その辺りの状況を教えてほしい。

(文化財課長)

確認の上、次回以降に報告する。

(委員)

春日居小学校や八代小学校の児童が施設を利用しているようだが、令和4年度からは、そこに石和北小学校が加わっている。これは施設の周知等を図り、その結果、利用する学校が増えたということか。

(文化財課長)

各学校に対しては、毎月開催している学校経営者会議の中で、施設の利用について周知を行っている。その成果もあり、利用する学校が増えたものと考えている。

(委員)

八代郷土館の本館は、建物自体に文化的価値はあるのか。次回の現地視察の時でも構わないので教えてほしい。

(文化財課長)

価値はあるものの、文化財指定をするまでには至っていない。次回以降、詳しい資料を提示する。

なお、旧石原家住宅については、江戸時代中期の住宅で、市の文化財に指定されている。

(委員)

建物の敷地内に天然記念物になっている植物があったような気がする。記憶違いかもしれないが確認しておいてほしい。

(文化財課長)

承知した。

ウ 春日居郷土館・小川正子記念館

(委員)

資料にも記載があるとおり、春日居郷土館は展示スペースが狭い。展示室は四角い倉庫のような形をしており、非常に特殊なスペースとなっているため、根本的な改修が必要であると以前から感じている。博物館の展示スペースというのは、ケースを壁に貼り付ける形が多く、来館者の動線を決めた上で、作品を展示していくことが一般的である。春日居郷土館は、そのような形に沿っていないため、色が出しづらい状況にある。

以前も申し上げたが、この施設は春日居郷土館という名前になっているものの、合併して20年が経過していることを踏まえれば、市立博物館として衣替えする必要があると考える。笛吹市の歴史は、すなわち山梨県の歴史である。笛吹市でなければ展示できないものがたくさんある。縄文、古墳、奈良、平安、一部中世など。通史的に展示するのではなく、ポイントを絞って、展示することも大事であると考えます。

小川正子記念館については、今後も後世に伝えていくべきものである。ハンセン病に関わった人たちはそれほど多くない。その中でも、山梨県に関連する人物としては、小川正子のほか、綱脇龍妙がいる。2人ともハンセン病患者の救済に関わった人物であるため、綱脇氏の資料も一緒に展示すれば、より博物館としての特色が出て、良いのではないかと思います。

(委員)

「目玉となる展示品が少ない」と課題にはあるが、決してそうではない。目玉となるものはあるが、それを掘り起こせていないと思っている。

釈迦堂遺跡博物館では、「Jomon Collection 笛吹市」という企画展を実施し、笛吹市から出土した資料を展示した経緯がある。その際、展示品である翡翠製硬玉大珠を前面に出し、SNSなどでも積極的に発信したところ、多くの来館者が訪れた。このように、見せ方一つで、来館者の増加を図ることは可能である。

県内見渡しても、寺本廃寺や国分寺跡など、これほど多くの遺跡を有する自治体は、笛吹市のほかに無い。これをもっと売り出していけば良いと思う。

(委員)

小川正子記念館には、小川正子氏の生家が復元され、公開されているが、資料にはそのことが記載されていない。何か理由があるのか。

(文化財課長)

特に理由はない。追記する。

(委員)

毎年春日居郷土館で実施している「わが町の八月十五日展」は、春日居町時代から行っている。展示を長く、継続的に行うというのは非常に大事なことであるため、もっと誇るべきである。今後も継続して開催するとともに、より多くの方に見ていただけるよう、周知徹底をお願いする。

(委員長)

津田青楓の企画展が開催された経緯を教えてほしい。

(文化財課長)

美術館運営協議会の中で「青楓作品をもっと広く発信してほしい」との話が出たことがきっかけである。その後、広い場所で展示した方が良いとの話になり、春日居郷土館の場所を借り、展示することとなった。

(委員)

学校利用という視点で見ると、青楓美術館は、一宮北小学校の利用がほとんどである。近隣なので仕方ないと思うが、どうしたらもっと市全域の小中学校で利用されるかということを考えることも大事だと思う。

春日居郷土館の「わが町の八月十五日展」は、今年、児童生徒が利用しやすいよう開催期間を長くしたと伺っている。学校側が利用しやすいよう配慮してくれていることは大変ありがたい。

一方で、先ほど長澤委員からも意見があったように、展示スペースの空間が勿体ないと感じる。課題を解決できるような改修を行うことができれば、更に多くの方に利用してもらえるのではないかな。

エ 小林家土蔵

(委員)

私は幼い頃から小林家土蔵の近くに住んでいるが、一度も入ったことがなく、中がどうなっているのか全く知らない。中を見てみないと様子が分からず、意見を言いようがない。ほかの委員も同じだと思う。

(委員長)

承知した。第3回検討委員会は現地視察を予定しているので、視察を通じて課題を共有した上で、第4回以降の検討委員会で議論を深めていきたいと思う。

オ 全体を通して

(委員)

本検討委員会は、市全体の文化施設の在り方を総合的に考えていく場であ

るが、各施設の課題等の説明を受け、何を議論すれば良いのか分からなくなった。老朽化している施設は建て替えるのか、それとも市内1か所に施設を集約し整備を行うのかなど、文化施設の在り方には、様々な方向性がある。現時点で全体的な方向性が見えてこない。

また、八田家書院や県立博物館との違いなどを整理することも、検討を進める上で必要ではないかと思う。

(委員長)

現在は個別の施設の話になっているが、市として文化振興をどのように考えているのか方向性のようなものを示した上で、議論を進めるべきとの意見であった。事務局からは何かあるか。

(事務局)

第3回検討委員会で現地視察を行った上で、第4回検討委員会において、市の総合計画や都市計画マスタープラン、観光振興計画等における文化施設の位置付けなどを説明し、全体像をお示しする。今後、その内容等も踏まえ、文化施設の在り方を全体的な視点で検討をしていただきたい。

(委員長)

1点質問だが、青楓美術館のほかに、全国で青楓作品を収蔵している美術館はあるのか。

(文化財課長)

全ては調べていないが、青楓作品のみを取り扱っている美術館は、青楓美術館のみである。荏岐市の大村美術館、東京都の松涛美術館でも、青楓作品を展示している。

4 その他

- (1) 第3回検討委員会(施設の視察)について
事務局から開催日時の候補日を提示した。

5 閉会

午後8時40分 閉会

第2回笛吹市文化施設の在り方に関する検討委員会

日時：令和6年9月30日（月）
午後7時00分～8時30分
会場：本館3階301会議室

次 第

- 1 開会
- 2 委員長あいさつ
- 3 議事
 - (1) 各施設の現状と課題について
- 4 その他
 - (1) 第3回検討委員会（施設の視察）について
- 5 閉会

【検討の目的】

本市の文化施設については、令和 3 年 3 月に策定した個別施設計画（文化施設編）において、文化施設の展示は、各施設に特色を持たせ、差別化を図ることを基本方針としていますが、全体の在り方について議論できていません。

より多くの方に本市の文化施設を知ってもらい、展示品を鑑賞し、親しんでもらうため、それぞれの施設の役割を明確にした上で、施設のみならず、所有する土器・出土遺物、民具、書籍、美術品等の維持管理が行えるよう、笛吹市教育委員会の権限に属する事務のうち、文化施設の在り方に関する検討に係る事務を総合政策部長に委任し、政策的な見地を含め、将来を見据えた望ましい文化施設の在り方に関する検討をするため、政策課において、笛吹市文化施設の在り方に関する検討委員会を立ち上げ、協議することとしました。

この検討委員会では、文化施設における市の方向性の決定に参考となるための報告書を取りまとめることとします。

1 各施設の現状と課題

(1) 笛吹市青楓美術館

ア 概要

所在地：笛吹市一宮町北野呂 3-3

開設年月：（開館）昭和 49 年 10 月

（寄贈）昭和 59 年 9 月

建物規模：鉄筋コンクリート造 2 階建て

敷地面積：206 m²延床面積：160 m²

用途別面積一覧

用途種別	面積 (m ²)	詳細	面積 (m ²)
展示・教育活動	83.50	主展示室 (2F)	39.50
		副展示室 (1F)	24.00
		応接室	20.00
保管・研究	24.00	倉庫 (収蔵庫)	12.00
		収蔵庫	12.00
管理その他	52.50	ホール	7.50
		受付	1.25
		職員控室	2.50
		トイレ	2.00
		通路	2.00
		旧キッチン	6.00
		物置 (旧風呂含む)	11.00
		階段 (1F)	3.75
		階段 (2F)	15.00
		P S	1.50
合 計	160.00		160.00

イ 設立の経緯

津田青楓（京都府出身の画家）と親交のあった小池唯則氏が、「美術館がなかった山梨県の人々に本物の美術品を見てもらいたい」との思いで、私財を投じ、昭和 49 年に設立した美術館。昭和 59 年、当時の一宮町に寄贈され、現在に至る。

ウ 展示内容

(ア) 主展示室・副展示室・応接室・階段(2F)

津田青楓作品を年2回テーマに基づいて展示。

(イ) ホール(エントランス)

壁面を使って「ぶどう畑のアートギャラリー」として市民の作品を展示。

(ウ) 階段(1F)

市民から公募した絵手紙作品を展示。

エ 収蔵作品・資料

分類	点数
油彩(洋画)	44
日本画	147
書	145
デッサン・水彩・パステル画	68
画帳	50
短冊・色紙	44
その他作品(刺繍・彫刻・陶板・団扇)	19
書籍	205
書簡類	15
写真	18
遺品(筆・落款印など)	179
合計	934

オ 常設展テーマ一覧

年度	テーマ	期間
R 元年度	花と富士 - 青楓墨彩画展 -	平成 31 年 3 月 19 日 ～令和元年 10 月 27 日
	文人画家津田青楓～ある画家の心の書～	令和元年 10 月 31 日 ～令和 2 年 5 月 31 日
R2 年度	春季展（練馬区立美術館『背く画家 津田青楓とあゆむ明治・大正・昭和』 に貸し出した絵画を中心に紹介）	令和 2 年 6 月 2 日 ～令和 2 年 10 月 25 日
	津田青楓生誕 140 周年記念回顧展 「書と日本画を楽しむ」	令和 2 年 10 月 27 日 ～令和 3 年 4 月 18 日
R3 年度	漱石との出会い 良寛へのあこがれ	令和 3 年 4 月 22 日 ～令和 3 年 10 月 3 日
	富士と日本の風景	令和 3 年 10 月 7 日 ～令和 4 年 4 月 17 日
R4 年度	青楓人物画展	令和 4 年 4 月 21 日 ～令和 4 年 9 月 4 日
	令和 4 年度笛吹市津田青楓展第 1 会場 「小池唯則と津田青楓」	令和 4 年 9 月 7 日 ～令和 5 年 4 月 16 日
R5 年度	花のある暮らし ～津田青楓が描く花の世界～	令和 5 年 4 月 19 日 ～令和 5 年 9 月 3 日
	青楓作品との対話 ～子どもたちは青楓作品から何を感じ たか～	令和 5 年 9 月 7 日 ～令和 6 年 3 月 10 日

カ 入館者数

年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
R元年度	112	180	153	77	62	79	75	121	72	66	82	0	1,079
R2年度	0	0	21	37	29	35	33	33	36	10	78	36	348
R3年度	36	47	33	32	7	25	68	77	69	40	43	43	520
R4年度	56	21	30	47	87	232	205	271	144	195	141	156	1,585
R5年度	274	141	226	110	129	158	197	178	111	197	137	153	2,011

キ 学校利用状況

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
利用者数	46人	30人	11人	33人	102人

ク 学校利用状況詳細

年度	利用学校等
R元年度	6月 一宮北小3年（模写）23人 1月 一宮北小6年（鑑賞文）23人
R2年度	11月 一宮北小6年（鑑賞文）15人 2月 一宮北小6年 15人
R3年度	11月 一宮北小3年（模写） 11人
R4年度	10月 一宮北小4年（鑑賞文） 10人 11月 一宮北小2年 23人
R5年度	6月 一宮北小2年 20人 6月 一宮北小 9人 11月 一宮北小3年（模写） 20人 11月 一宮西小6年（鑑賞文）53人

ケ 運営状況

歳入

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
歳入総額	165 千円	134 千円	100 千円	375 千円	374 千円
観覧料	78 千円	26 千円	45 千円	168 千円	248 千円
図書頒布 代代	87 千円	108 千円	55 千円	207 千円	126 千円

歳出

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
歳出総額	4,102 千円	4,221 千円	4,305 千円	4,602 千円	2,749 千円
委員報酬	20 千円	20 千円	17 千円	17 千円	17 千円
管理人賃金 等	2,218 千円	2,349 千円	2,397 千円	2,415 千円	908 千円
講師謝礼				41 千円	
需用費	767 千円	782 千円	813 千円	1,014 千円	754 千円
通信費	52 千円	50 千円	55 千円	60 千円	46 千円
委託料	740 千円	739 千円	742 千円	743 千円	727 千円
賃借料	305 千円	281 千円	281 千円	281 千円	281 千円
工事請負費					
備品購入費				31 千円	16 千円
			1 階空調機 が破損した ため、機器 交換を行 う。		1 階展示室 加湿器の機 器交換を行 う。

コ 職員体制（令和6年度）

- (ア) 会計年度任用職員（学芸員）1 人 （1 日 6 時間週 4 日勤務）
 (イ) 会計年度任用職員（管理人）4 人 （1 日 4 時間週 3 日勤務）

サ 課題

- (ア) 昭和 56 年の新耐震基準以前に建築された建物のため、新耐震基準を満たしているかは不明。
- (イ) 収蔵作品の保護のため、1 階の応接室（展示室として利用）、2 階の収蔵庫及び館長室（収蔵庫として利用）の窓を塞ぎ、鉄格子を付けていることにより、避難経路が確保できないため、消防法不適格の状態である。美術館は当該規定が制定される以前の建物であるため、現状では遡及適用されないが、耐震補強などを行う場合は適用されることになる。
- (ウ) 冬季になると収蔵庫の壁際が結露する。
- (エ) 収蔵庫のスペースが手狭でほぼ収蔵量の限界に達しており、今後収蔵スペースが足りなくなる。
- (オ) 照明機器の LED 化を行っていない。
- (カ) 収蔵庫の照明機器に殺菌効果のある蛍光灯を使用しているが、将来的に製品が供給されるか不明である。
- (キ) 建物の老朽化により壁面に小さなヒビが見られ、雨水が浸入することがある。
- (ク) 施設の敷地内に駐車スペースが無いので、駐車場として隣接地を借り上げている。
- (ケ) アクセス道路の復員が狭いため、大型車の乗り入れができない。
- (コ) 古い建物のため、バリアフリー化されておらず、2 階の展示スペースは階段を利用しなければならない。
- (サ) 年 2 回、収蔵品の中からテーマを決めて作品の展示替えを行っているが、観覧者からは、あまり代わり映えしないという声が聞かれる。
- (シ) 青楓作品の魅力を十分に伝えることができていない。
- (ス) 体験教室、ミニ講演会、コンサートなどのイベントを開催する際、他の部屋がないので展示室を使用するが、展示作品に影響がないよう注意しなければならない。また、収容人数も 10 人程度と少数での開催しかできない。

(2) 笛吹市八代郷土館

ア 概要

所在地：笛吹市八代町南 796

開設年月：（開館）昭和 52 年 4 月

敷地面積：2,412 m²



イ 設立の経緯

昭和 48 年、大森節夫氏から旧大森銀行八代支店の土地建物の寄贈を受け、八代町で資料展示室などの改修を行い、昭和 52 年から郷土資料館として開館。町内外から収集した約 2,000 点を収蔵している。

観覧については、平成 25 年から予約制としており、主に小学校の社会科見学の場所として利用されているが、市内外で民具等に興味を持った方などを含め、年間 150 人程度の来館者がいる。

ウ 施設

(ア) 本館（旧大森銀行八代支店）

建物構造：木造

延床面積：522 m²

八代郷土館本館として郷土資料を展示。1 階にはカマドを中心とした炊事道具、食膳具などの生活用品のほか、旧大森銀行関係資料を展示。2 階には米作りや養蚕の道具を中心に産業関係資料などを展示。

(イ) 旧石原家住宅

建物構造：木造

延床面積：102 m²

18 世紀の江戸時代中期に建てられた農家住宅。旧八代町南地内にあったものを移築した。笛吹市の文化財に指定されている。

(ウ) 土蔵

建物構造：土蔵造り

延床面積：130 m²

明治元年（1868）に建てられた土蔵で、内部は 2 階構造。郷土資料を収蔵。

(エ) 収蔵庫（プレハブ）

建物構造：軽量鉄骨造り

延床面積：158 m²

郷土資料を収蔵。

エ 入館者数

年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
R 元年度	0	0	0	34	10	0	0	150	22	0	0	0	216
R2 年度	0	0	0	0	0	0	0	0	0	72	9	9	90
R3 年度	0	0	0	0	0	0	0	5	3	0	0	0	8
R4 年度	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	140	0	144
R5 年度	0	0	0	0	0	0	3	0	0	95	81	0	179

オ 学校利用状況

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
利用者数	183 人	68 人	0 人	88 人	176 人

カ 学校利用状況詳細

年度	利用学校等
R 元年度	7 月 七夕を楽しむ会 八代地区保育所園児 33 人 11 月 春日居小学校 3 年 66 人 11 月 八代小学校 3 年 84 人
R2 年度	1 月 八代小学校 3 年 68 人
R3 年度	
R4 年度	2 月 八代小学校 3 年 55 人 2 月 石和北小学校 3 年 33 人
R5 年度	1 月 石和北小学校 3 年 22 人 1 月 八代小学校 3 年 73 人 2 月 春日居小学校 3 年 81 人

キ 運営状況

歳入 観覧料は無料のため、歳入なし

歳出

	令和元年度	令和２年度	令和３年度	令和４年度	令和５年度
歳出総額	1,182 千円	908 千円	1,407 千円	798 千円	776 千円
管理謝礼	166 千円	144 千円	151 千円	104 千円	
需用費	74 千円	78 千円	68 千円	70 千円	73 千円
通信費	48 千円	39 千円	38 千円	38 千円	38 千円
委託料	894 千円	647 千円	583 千円	585 千円	665 千円
工事請負費			568 千円		
			ネットフェ ンス改修工 事を実施。		

ク 職員体制（令和６年度）

職員の常勤はなし

※館内の清掃、屋外の草刈りはシルバー人材センターに委託

ケ 課題

- (ア) 本館（旧大森銀行）は、漆喰壁の劣化、土蔵では壁にひび割れが入り、建物の傷みが見られる。
- (イ) 本館、旧石原家住宅及び土蔵は、いずれも明治時代以前に建築された建物であるため、耐震性があるかは不明。
- (ウ) 古建築を展示施設として利用しているため、座敷へ上がる際に段差があり、バリアフリーを実現できていない。また、２階への階段も急勾配で健常者でも登るのに危険を伴う。
- (エ) アクセス道路及び駐車場ともに狭いため、マイクロバスの乗り入れができない。児童は、八代支所でバスを降り、徒歩で来館する。
- (オ) 民具の使い方を知っている人が高齢となり、学芸員でもわからないことが多い。

- (カ) 展示資料を説明する学芸員を育てる必要がある。
- (キ) 現在、観覧は予約制にしているが、常時、観覧できるようにするためには、ボランティアを活用した運営を検討する必要がある。

(3) 笛吹市春日居郷土館・小川正子記念館

ア 概要

所在地：笛吹市春日居町寺本 170-1

開設年月：平成 3 年 11 月

敷地面積：2,005 m²

建物構造：鉄筋コンクリート造

延床面積：1,095.45 m²

養鯉池：76.48 m² 深さ 1.5m



用途別面積一覧

用途種別	面積 (m ²)	詳細	面積 (m ²)
展示・教育活動	499.950	展示室	264.000
		特別展示室 (小川正子記念館)	99.000
		談話室	70.225
		研修室	66.725
保管・研究	331.128	収蔵庫	165.000
		特別収蔵庫	33.000
		作業室 (1)	67.128
		作業室 (2)・荷解室	66.000
管理その他	264.372	エントランス	9.000
		ホール (受付含む)	194.000
		トイレ	30.000
		湯沸室	4.872
		事務室	26.500
合 計	1,095.450		1,095.450

イ 設立の経緯

平成 3 年に「古代甲斐国の政治・文化の中心であった国府のまち」を広く知らしめるため、白鳳時代の出土品や遺構群の紹介、また、春日居町出身で難病とされていた「ハンセン病」の治療にあたり、その功績が顕著である「小川正子」の足跡を広く住民に伝承するとともに、地域活性の拠点として建設された。

開館当初から町営で運営されており、合併により笛吹市が引継ぎ現在に至る。

ウ 展示内容

(ア) 展示室

常設展「笛吹市の歴史と文化」を展示

- a 旧石器時代（原遺跡出土ナイフ形石器、物見塚遺跡出土石器など）
- b 縄文時代（桂野遺跡出土土器・土偶、三光遺跡出土硬玉大珠など）
- c 弥生時代（堺沢遺跡出土土器・柱・礎板、西原遺跡出土壺型土器など）
- d 古墳時代（岡銚子塚古墳出土埴輪、御崎古墳出土毛彫馬具、長田古墳群出土品、大蔵経寺前遺跡出土祭祀遺物、大原遺跡出土土器・祭祀遺物など）
- e 白鳳時代（狐塚古墳出土銅鏡、寺本廃寺跡出土瓦・塑像仏像・墨書土器など）
- f 奈良時代（甲斐国分寺跡・国分尼寺跡出土瓦・墨書土器など）
- g 平安時代（大原遺跡出土土器・墨書土器・皇朝十二銭・腰帶具・鉄製農工具など）
- h 鎌倉～戦国時代（西田町遺跡出土土器・陶磁器、信虎誕生屋敷跡出土土器・陶磁器、旭山烽火台模型（寄託品）など）
- i 江戸時代（徳条区有文書及び文書筆筭など）
- j 明治～昭和時代（明治 40 年水害関係資料など）

(イ) 特別展示室（小川正子記念館）

ハンセン病患者の治療につくした医師・小川正子の生涯を展示

- a 小川正子胸像
- b 小川正子遺品（聖書・医学教科書・注射器など）
- c 小川正子の書簡・日記など
- d 『小島の春』関係資料（単行本など）
- e 長島愛生園関係資料（約束の石、長島愛生園模型など）

(ウ) 研修室

企画展を開催

市民団体による作品を展示

企画展開催期間中に常設展「笛吹市の歴史と文化」移動して展示

(エ) 談話室

企画展の補助展示室として利用

企画展開催期間中に常設展「笛吹市の歴史と文化」移動して展示

エ 収蔵資料

分類	件数	備考
郷土史関係資料	約 8,500 件	古文書・民具類 約 500 件 市内遺跡出土品 約 8,000 件 ※特記 日本遺産(星降る中部高地の縄文世界) ・桂野遺跡出土土偶ほか 3 点 県指定文化財 ・御崎古墳出土品 (毛彫馬具など) ・古柳塚古墳出土品 (装飾馬具など) 市指定文化財 ・硬玉大珠 ・付木製造道具一式
小川正子関係資料	約 200 件	遺品 (日記・書簡など)・写真
八月十五日展関係資料	約 1,600 件	遺影 約 1,100 点 遺品 約 500 件
合計	約 10,300 件	

オ 企画展開催状況

年度	名称	期間	概要
R 元年度	ドローン撮影による写真展・春日居編	4 月 1 日 ～6 月 30 日	山梨岡神社周辺、寺本廃寺跡周辺、甲斐奈神社周辺、保雲寺周辺をドローン撮影した写真を展示
	わが町の八月十五日展	7 月 17 日 ～9 月 8 日	子ども達に戦時中の日本の様子を理解してもらうため、当時の教科書、子ども向け雑誌、玩具などを展示
	リニア L0 系最後の写真展	10 月 16 日 ～11 月 4 日	山田清岡氏によるリニア L0 (エルゼロ) 系の写真展 令和 2 年度から改良型が走行する予定
	縄文ワールド一緒にオ	11 月 13 日	D1 グランプリで 1 位に選

	ドグウ！「なが山房子と子ども展」	～1月19日	ばれたなが山房子さんの作品（土器、土偶、絵画）と幼稚園児の作った土器を展示
R2 年度	わが町の八月十五日展 「戦時中の家族のつながり」	8月5日 ～8月31日	戦地から故郷に送られた手紙などを通じて戦時中の家族のつながりを紹介
R3 年度	わが町の八月十五日展 「76年前のあの日ー甲府空襲と笛吹市ー」	7月14日 ～9月20日	春日居町鎮目に落ちた焼夷弾や空襲の様子が記録された「学校日誌」などがら、笛吹市内における句集の様子を紹介
	笛吹市所蔵美術品展 2021	10月4日 ～12月20日	笛吹市が所蔵する穴山勝堂の『疾走する貨物車』・桑原福保の『炭を運ぶ』・萩原英雄の『石和早春原画』などの絵画を展示
	文化協会和紙ちぎり絵部作品展	3月3日 ～3月13日	文化協会和紙ちぎり絵部の会員による作品展。故郷の風景を描いた作品や草花を描いた作品等を展示
	なが山房子展～縄文人への手紙～	3月24日 ～4月11日	縄文人の手紙をテーマにした絵画や水煙文土器等を展示
R4 年度	パネル展「小川正子と長島愛生園」	6月8日 ～7月4日	小川正子生誕 120 年にあたり、正子が勤めた長島愛生園の歴史・現状を理解するため、パネルを用いて展示

	わが町の八月十五日展 「学校日誌で振り返る 八月十五日」	7月13日 ～8月29日	笛吹市内の学校に保存さ れている学校日誌・学校沿 革誌などから終戦の日の 学校の様子を紹介
	津田青楓～前進の時代	9月14日 ～12月26日	京都に生まれた津田青楓 の生い立ちから図案作成、 フランス留学を経て洋画 断筆に至るまでの前半生 の作品を紹介
	押し花作品展	11月2日 ～11月21日	ふしぎ花倶楽部会員によ る押し花作品と、俳句のコ ラボレーション展示
R5 年度	パネル展「病室という 名の監房～ハンセン病 療養所の監禁室～」	6月7日 ～7月3日	ハンセン病療養所にかつ てあった「特別病室」とい う名の「監房」施設につい てパネルで紹介
	わが町の八月十五日展 「戦時下の日々」	7月12日 ～8月28日	春日居町徳条区に残され ていた行政文書を通して、 戦時下の人々の暮らしを 紹介
	津田青楓～二十世紀最 後の文人画家	9月9日 ～12月17日	洋画断筆以降、伝統的な日 本画の世界に立ち返った 津田青楓の後半生の作品 を紹介

力 入館者数

月別入館者数

年度	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
R 元年度	185	135	100	233	800	107	101	317	200	92	44	0	2,314
R2 年度	0	0	36	85	560	83	80	161	62	35	35	51	1,188
R3 年度	80	62	40	213	65	129	120	190	192	41	37	467	1,636
R4 年度	159	91	135	239	449	102	276	426	182	40	46	67	2,212
R5 年度	95	68	110	285	567	81	120	352	121	78	68	111	2,056

キ 学校利用状況

	令和元年度	令和２年度	令和３年度	令和４年度	令和５年度
利用者数	271 人	249 人	0 人	219 人	318 人

ク 学校利用状況詳細

年度	利用学校等
R 元年度	8 月 春日居小中学校教員学習会 20 人 8 月 山梨北中教員学習会 9 人 8 月 石和西小 6 年 57 人 8 月 御坂西小 6 年 70 人 8 月 境川小 6 年 29 人 8 月 春日居小 6 年 60 人 8 月 石和北小 6 年 26 人
R2 年度	8 月 御坂西小 6 年 84 人 8 月 石和北小 6 年 28 人 8 月 境川小 6 年 26 人 8 月 春日居小 6 年 52 人 10 月 山梨南中 2 年校外学習 5 人 11 月 春日居小 3 年 54 人
R3 年度	
R4 年度	8 月 春日居小 6 年 63 人 11 月 春日居小 3 年（鑑賞文） 42 人（鑑賞文） 11 月 一宮西小 6 年（鑑賞文） 45 人（鑑賞文） 12 月 春日居中 3 年 59 人 12 月 一宮南小 6 年 10 人
R5 年度	7 月 境川小 6 年 35 人 7 月 笛吹市教育協議会（市内の小中学生を対象とした学習会） 60 人 8 月 春日居小 6 年 61 人 8 月 石和北小 6 年 30 人 11 月 春日居小 3 年 80 人 3 月 富士見小 5 年 52 人

ケ 運営状況

歳入

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
歳入総額	469 千円	145 千円	172 千円	235 千円	181 千円
入館料	404 千円	97 千円	138 千円	165 千円	143 千円
図書頒布代	65 千円	48 千円	34 千円	70 千円	38 千円

歳出

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
歳出総額	6,970 千円	6,796 千円	6,057 千円	7,394 千円	8,608 千円
委員報酬	77 千円	77 千円	77 千円	77 千円	88 千円
管理人賃金等	3,067 千円	2,488 千円	2,210 千円	2,322 千円	2,370 千円
講師謝礼			52 千円		29 千円
需用費	1,972 千円	1,586 千円	1,864 千円	2,421 千円	3,014 千円
通信費	138 千円	140 千円	143 千円	157 千円	141 千円
委託料	1,520 千円	1,482 千円	1,534 千円	2,249 千円	2,306 千円
賃借料	196 千円	172 千円	177 千円	168 千円	168 千円
工事請負費		851 千円			
備品購入費					492 千円
備考		特別収蔵庫の空調機器を入替修繕。			展示品汚損防止柵を購入。

コ 職員体制（令和6年度）

会計年度任用職員（学芸員）1人（1日6時間週4日勤務）

会計年度任用職員（管理人）4人（1日4時間週3日勤務）

サ 課題

- (ア) 展示室が少ないため、市の歴史や文化をいつでも学べる常設展と、期間を定めてテーマに沿った展示を行う企画展を並行して開催することができない。(個別施設計画)
- (イ) 「わが町の八月十五日展」など大規模な企画展を展示室で開催すると、その期間中常設展示は研修室などに移動して展示するため、展示の規模が縮小される。
- (ウ) 開館当時は、模型や民具などの露出展示が主体であったため、鍵のかかる展示ケースが少ない。
- (エ) 展示台が壁際に作り付けられているため、壁面に絵画を展示する場合は展示品までの距離が遠くて見にくいとの意見がある。
- (オ) 展示室、特別収蔵庫は空調機を設置して温度調整と除湿をしているが、加湿機能がないため、冬季は適正な湿度が保てない。
- (カ) 目玉となる展示品が少ない。
- (キ) 出土品は多数あるが、それを補う模型類は開館当初の 30 年以上前に作成した物で、作成等の検討をする必要がある。
- (ク) 笛吹市の歴史にあった展示パネルが作られていない。
- (ケ) 一番身近である近世以降の歴史資料が不足している。

(4) 旧小林家土蔵

ア 概要

所在地：笛吹市石和町市部 1080

開設年月：不明

敷地面積：公園敷地の一部

建物面積：175 m²(総 2 階建て)

建物構造：木造



イ 設立の経緯

石和町出身の実業家小林中氏の旧邸宅の土蔵。

小林氏は昭和 31 年、当公園になっている敷地を旧邸宅とともに当時の石和町に寄贈され、邸宅はしばらく中央公民館及び石和町文化学園として使用されていたが、中央公民館は、昭和 46 年、峡東病院東側に新築移転し、文化学園は、昭和 47 年、廃校となって建物の大部分が取りこわされ、旧土蔵だけをのこした。

これは明治の中期に建てられたものと思われ、小林家では文庫蔵として使用していた。石積み上に土台をおき、厚い土壁に固められた重厚な土蔵である。石和町では、これを保存し小林氏の好意を永く記念する意味で中を補修し、昭和 49 年 11 月 3 日石和町民俗文化財展示館として開館した。1 階を展示室、2 階を収蔵庫として民具を収蔵していた。

昭和 62 年、石和町立図書館に歴史民俗資料展示室が設けられたのと同時に閉館となり、現在は倉庫として利用している。

ウ 活用状況

民具や民俗資料、八田家書院にて展示する雛飾りなどの物品を収納する倉庫として活用している。

エ 運営状況

歳入 収蔵庫として利用しているため歳入なし。

歳出

	令和元年度	令和 2 年度	令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度
歳出総額	8 千円	8 千円	4 千円	6 千円	8 千円
需用費	8 千円	8 千円	4 千円	6 千円	8 千円

オ 職員体制

収蔵庫として活用しており展示物等がないため、管理人を含め、職員の配置はない。

カ 課題

- (ア) 土蔵のため外壁の管理や瓦の修繕に費用を要す。
- (イ) 市部通り沿いで、バス停や公園の入口など好立地なことから、他の用途の活用を検討したいが、土蔵内にある物品の移転場所や建物の改修、今後の所管検討などが必要となる。

笛吹市ふるさとの偉人



笛吹市教育委員会
笛吹市偉人選考委員会

笛吹市ふるさとの偉人

笛吹市には明治時代から太平洋戦争前後まで政治・経済、農林業、教育、芸術、学術など幅広い分野で活躍した多くの人がいました。

近代日本や山梨の礎を築いた笛吹市ゆかりの先人の生き方を知ることは、笛吹市の歴史・文化の再認識につながります。

また、今を生きる私たちが、未来に向けて夢や希望を思い描き、実現に向けて努力するきっかけになると思います。

そこで、笛吹市ではふるさとの偉人選考委員会を設置し、ご遺族の方々並びに関係各位のご指導を賜るなかで偉人の生涯や業績などを紹介していくことにしました。

平成 29 年 3 月

笛吹市教育委員会

笛吹市偉人選考委員会

「笛吹市ふるさとの偉人」一覧

～ 取り上げる人物 ～

氏 名	生 没 年	主 な 功 績
あ か お よ し お 赤 尾 好 夫	1907（明治 40）年～ 1985（昭和 60）年	旺文社創立。赤尾の「豆草」生みの親。現文化放送及び現テレビ朝日など放送事業にも貢献。
あ な や ま し ょ う ど う 穴 山 勝 堂	1890（明治 23）年～ 1971（昭和 46）年	代表作「夕映えの松」が昭和 6 年帝展特選を受賞した日本画家。松と富士山の絵を多数描く。
あ み の よ し ひ こ 網 野 善 彦	1928（昭和 3）年～ 2004（平成 16）年	「網野史学」により従来の日本中世史を転換させた日本中世史研究家。山梨県史の編纂・山梨県立博物館の開設に尽力。
い い だ だ こ つ 飯 田 蛇 笏	1885（明治 18）年～ 1962（昭和 37）年	俳誌「雲母」を主宰。ホトトギス派の重鎮。生家を「山廬」と呼んだ。代表句は「芋の露連山影を正うす」
い い だ り ゆ う た 飯 田 龍 太	1920（大正 9）年～ 2007（平成 19）年	飯田蛇笏の四男。戦後俳壇の中心的俳人。蛇笏を継ぎ俳誌「雲母」を主宰。代表句は「水澄みて四方に閑ある甲斐の国」
お お く ば ま つ よ 大 久 保 松 代	1898（明治 31）年～ 1994（平成 6）年	日本初の耳鼻咽喉科女性医師。喜寿を機に引退するまでに診療した患者数は 100 万人ともいわれる。
お が わ ま さ こ 小 川 正 子	1902（明治 35）年～ 1943（昭和 18）年	ハンセン病患者救済に生涯をささげた女性医師。手記「小島の春」はベストセラーになり映画化された。
か ざ ま よ し す け 風 間 義 甫	1883（明治 16）年～ 1971（昭和 46）年	明治 40 年大水害後、笛吹川河川改修工事及び災害復旧に尽力。
か と う し げ は る 加 藤 重 春	1884（明治 17）年～ 1957（昭和 32）年	日本一桃源郷の礎を築いた桃栽培の先駆者。
き た の た か は る 北 野 隆 春	1891（明治 24）年～ 1981（昭和 56）年	「人より一倍の努力をなす」をモットーに、スタンレー電気を創業する。人間尊重のもと、昭和 50 年「北野生涯教育振興財団」を設立。
こ い け た だ の り 小 池 唯 則	1903（明治 36）年～ 1982（昭和 57）年	津田青楓の書画と人間性に魅了され、昭和 49 年故郷に県内美術館のさがけとなる青楓美術館を設立。
こ ば や し あ た る 小 林 中	1899（明治 32）年～ 1981（昭和 56）年	初代日本開発銀行（現在の日本政策投資銀行）総裁。アラビア石油社長。「財界四天王」といわれ戦後日本の復興に尽力。
こ ま つ ど う へ い 小 松 導 平	1878（明治 11）年～ 1938（昭和 13）年	明治 40 年大水害後、旧笛吹川慶河川開拓事業に尽力。今日の石和温泉郷の礎を築く。
は っ た た つ や 八 田 達 也	1854（嘉永 7）年～ 1916（大正 5）年	山梨県の養蚕技術改良に勤め、温暖育法を導入。富士風穴を利用した日本有数の蚕種貯蔵所「八達館」設立。『蚕事輯説』を著す。
は や か わ の り つ ぐ 早 川 徳 次	1881（明治 14）年～ 1942（昭和 17）年	日本に初めて地下鉄浅草・上野間（現在の東京メトロ地下鉄銀座線の一部）を開設し、「日本の地下鉄の父」と呼ばれる。今日の東京の地下鉄網の礎を築いた。
ふ か さ わ し ち ろ う 深 沢 七 郎	1914（大正 3）年～ 1987（昭和 62）年	小説家・ギタリスト。代表作「楢山節考」「笛吹川」を著し、「根っからの甲州人らしい」作家と評された。
ほ り う ち り ょ う へ い 堀 内 良 平	1870（明治 3）年～ 1944（昭和 19）年	富士身延鉄道（現 J R 身延線）、富士山麓電気鉄道（現富士急行）を創設。富士山麓を世界に誇るリゾート地として発信する。
ま え じ ま し ん じ 前 嶋 信 次	1903（明治 36）年～ 1983（昭和 58）年	イスラム史・東洋史研究の第一人者。「アラビアン・ナイト」を初めて原典から翻訳。『アリババと 40 人の盗賊』『アラジンと不思議なランプ』の 2 編の翻訳が遺作となる。
よ し お か じ ゅ ん さ く 吉 岡 順 作	1864（元治元）年～ 1944（昭和 19）年	日本住血吸虫病（地方病）撲滅に尽力した医師。医療を通じて人々の生命尊重に献身する。
よ ね や ま あ い し 米 山 愛 紫	1906（明治 39）年～ 1973（昭和 48）年	大正・昭和期の童謡詩人。「武田節」「新甲州音頭」や笛吹市内の学校の校歌等を作詞。





(赤尾英夫氏蔵)

旺文社創立 赤尾の「豆単」生みの親

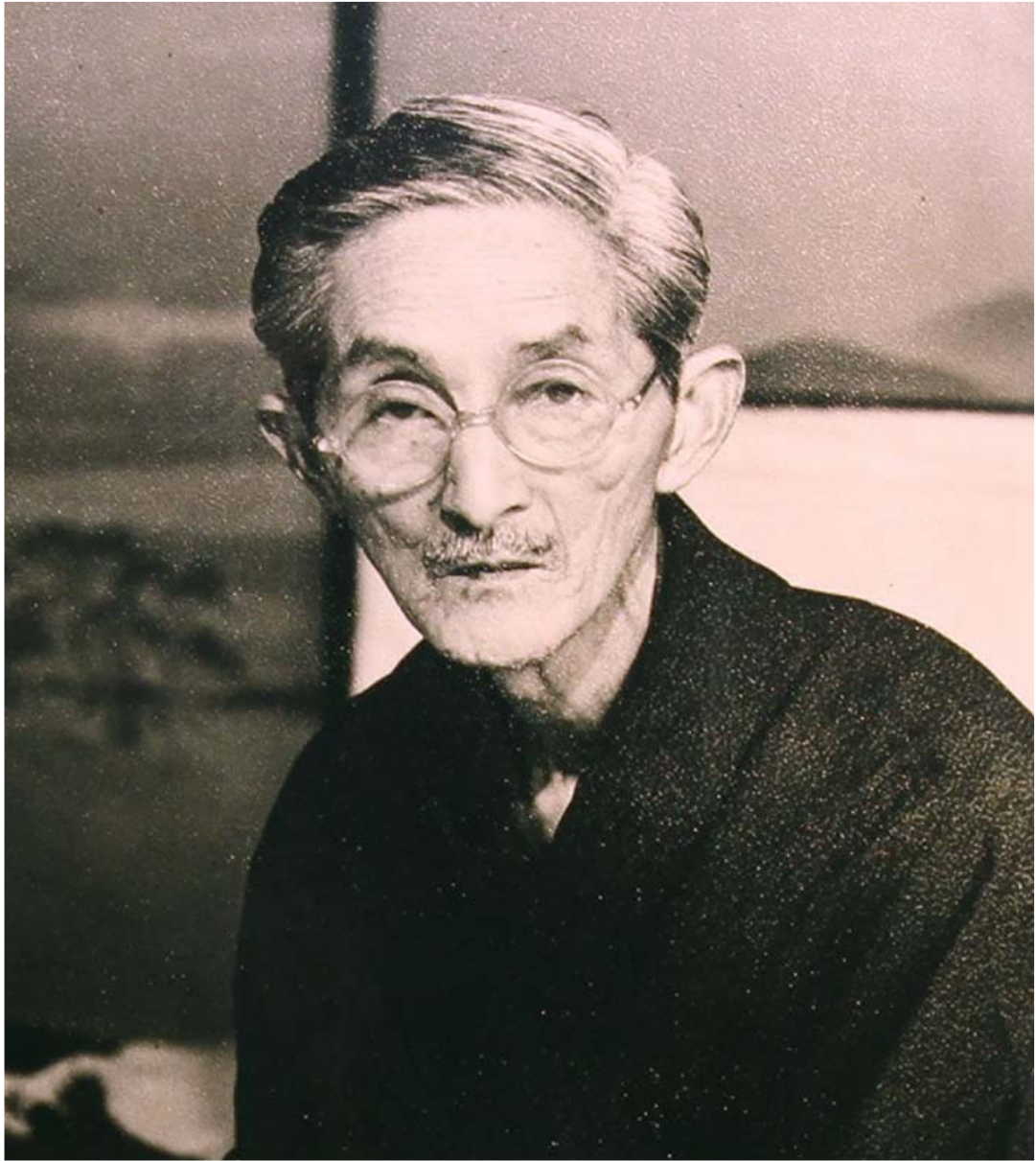
赤尾 好夫

あかお よしお

明治 40 年 (1907) 山梨県東八代郡英村^{はなぶさ}中川 (現笛吹市石和町) に生まれる。
肥料商を手広く営むアメリカ帰りの父と文学好きの母のもとで育った読書好きな少年は、古今東西のあらゆる本を濫読し、後に教育専門の出版社「旺文社」の社長となる。

東京外国語学校 (現東京外国語大学) で英語を学び、昭和 7 年 (1932) 旺文社の前身である「欧文社」を創業し出版事業開始。機関誌『受験旬報』(現『螢雪時代』) 創刊。『英語基本単語熟語集』(通称赤尾の「豆単」) は学生の圧倒的支持を得てロングセラーとなる。戦後、「日本英語教育協会理事長赤尾奨学金」を創設。また首都圏 AM ラジオ第 2 局日本文化放送協会 (現文化放送) 設立に関わり、昭和 27 年 (1952) ラジオでの受験講座開設。「日本民間放送連盟放送研究所」の初代^{しやうだい}所長、テレビ朝日の前身である「日本教育テレビ」を設立するなど放送事業に積極的に進出する。旺文社の社是「夢高くして足地にあり良書を供して英才を育て文化を興して以て栄えよ」は彼の哲学であった。

昭和 60 年 (1985) 78 歳で没する。「夢高く足地にあれと願いつつ暗やみの中を手さぐりでゆく」は長年若者たちを見続けてきた彼の辞世である。



(穴山徹氏蔵)

松と富士山の絵で知られる日本画家 代表作は「夕映えの松」

穴 山 勝 堂

あなやま しょうどう

松と富士山の絵で知られる日本画家穴山勝堂は、明治 23 年 (1890) 山梨県東八代郡錦村八千蔵 (現笛吹市御坂町) に生まれる。本名は義平。

大和絵の伝統を新しい時代に生かそうと考え風景描写に着目した日本画家の松岡映丘^{えいしゅう}に師事し、大正 10 年 (1921) 「新興大和絵会」を映丘の門下生 4 名で結成。その中核メンバーとなる。昭和 6 年 (1931) 信州別所温泉の熊野神社の御神木の松を描いた「夕映えの松」を「帝展」に初めて出品し特選となる。作品は皇室御買上げとなり、那須御用邸に納められた。その後も第 14 回帝展で「磯松風」が特選となり、以後松の作品を描く勝堂として中央画壇での地歩を固めて行く。

晩年の 20 余年は一宮町一ノ宮の浅間神社近くで過ごし、県の美術協会を中心に活躍する。晩年はオートバイに乗る人や乗り物など「スピード」をテーマにした作品や、富士山を描くことにも情熱を燃やしたという。昭和 46 年 (1971) 80 歳で没する。



(山梨県立博物館所蔵)

「網野史学」により従来の日本中世史を転換

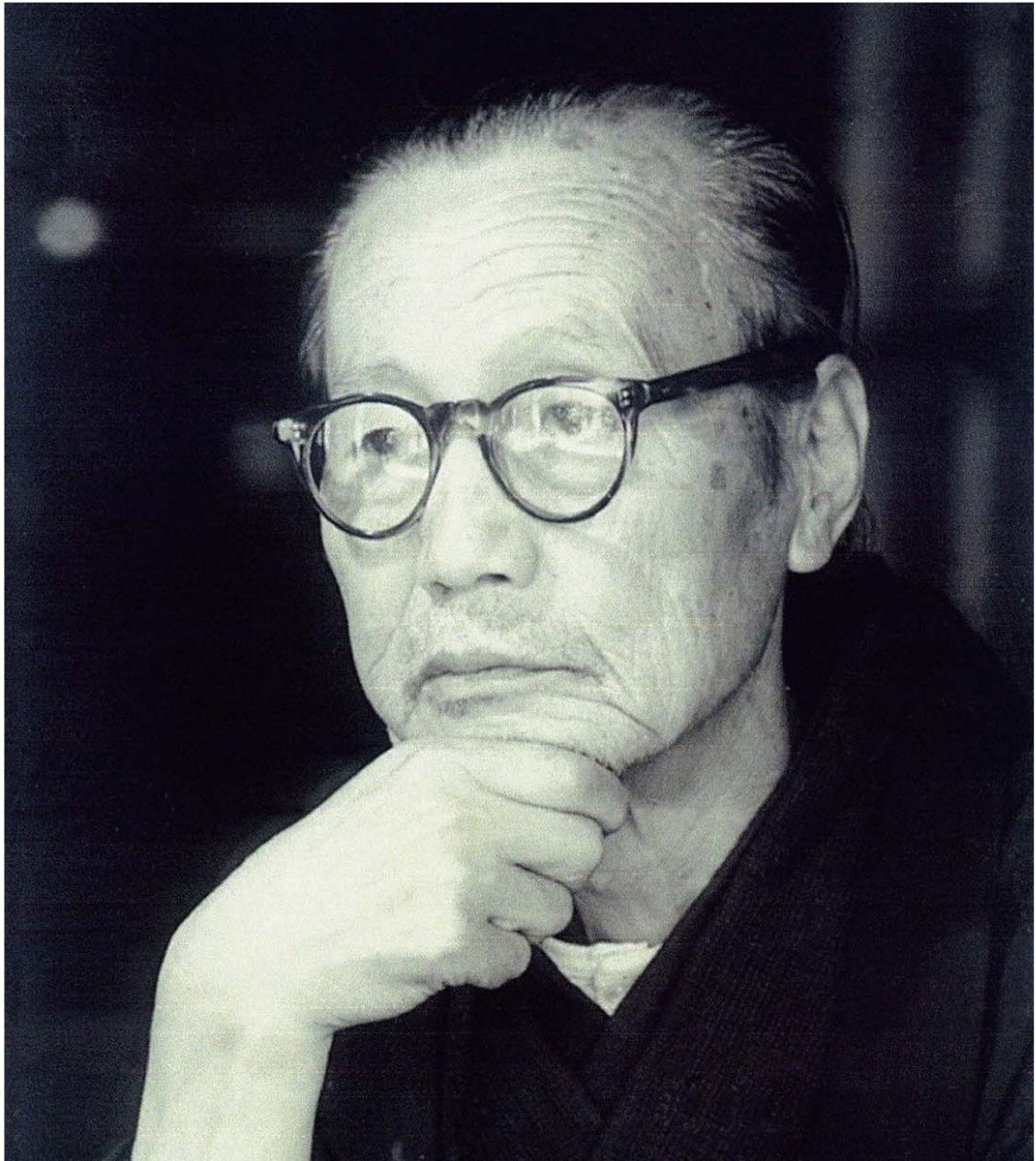
網 野 善 彦

あみの よしひこ

昭和 3 年 (1928) 山梨県東八代郡錦村井之上にじょう (現笛吹市御坂町) に生まれる。生家は山梨中央銀行の前身のひとつ網野銀行創業の網野家。幼少期に東京へ移住する。昭和 25 年 (1950) 東京大学文学部国史学科を卒業し(財)日本常民文化研究所研究員、昭和 29 年 (1954) からは高等学校教諭。勤務の傍ら東京大学史料編纂所(通称『史料』)に通い太良庄等の古文書を筆写、昭和 41 年 (1966) に『中世荘園の様相』を著す。昭和 42 年 (1967) 名古屋大学文学部助教授に就任。平成 7 年 (1995) からは神奈川大学経済学部教授となり、平成 10 年 (1998) に定年退職。その間日本中世史研究に邁進、昭和 49 年 (1974) に『蒙古襲来』、昭和 53 年 (1978) には『無縁・公界・楽』を著し、脚光を浴びる。その学説は「網野史学」と呼ばれ、学際的研究手法により日本中世の職人や芸能民など漂泊民の世界を明らかにし、従来の日本中世史を転換させるものであった。網野史学は歴史学のみならず小説や映画・テレビ界などにも影響を与え創作にも取り入れられた。

晩年は、『山梨県史』の編纂や山梨県立博物館建設の構想にも携わり、故郷山梨の中世史研究の再構築も試みている。

平成 12 年 (2000) から闘病生活に入り、平成 16 年 (2004) 76 歳で没し、山梨県立博物館にほど近い慈眼山南照院に眠る。



(飯田秀實氏蔵)

俳誌『雲母』を主宰 ホトトギス派の重鎮

飯 田 蛇 笏

いいだ だこつ

明治 18 年 (1885) 山梨県東八代郡ごせい五成村小黒坂 (現笛吹市境川町) に生まれる。本名は武治。たけはる

生家の裏手には狐川が流れ、その背後には後山があり、蛇笏は生家を山廬と呼んだ。

大正 3 年 (1914) 高浜虚子が選者の『ホトトギス』雑詠欄で巻頭を飾り、以降同欄に数多くの俳句が紹介される。

大正 4 年 (1915) 愛知県西尾市から『キラ、』が創刊され、第二号より俳句欄の選者となる。大正 6 年 (1917) 『キラ、』を『雲母』に改め主宰。大正 14 年 (1925) 『雲母』発行所を西尾市から甲府市に移し、昭和 5 年 (1930) には境川村 (当時) の自宅に移す。

昭和 37 年 (1962) 77 歳で没する。翌年、甲府城二の丸跡に文学碑が建立されたが、現在は甲府市の芸術の森公園内に移設されている。

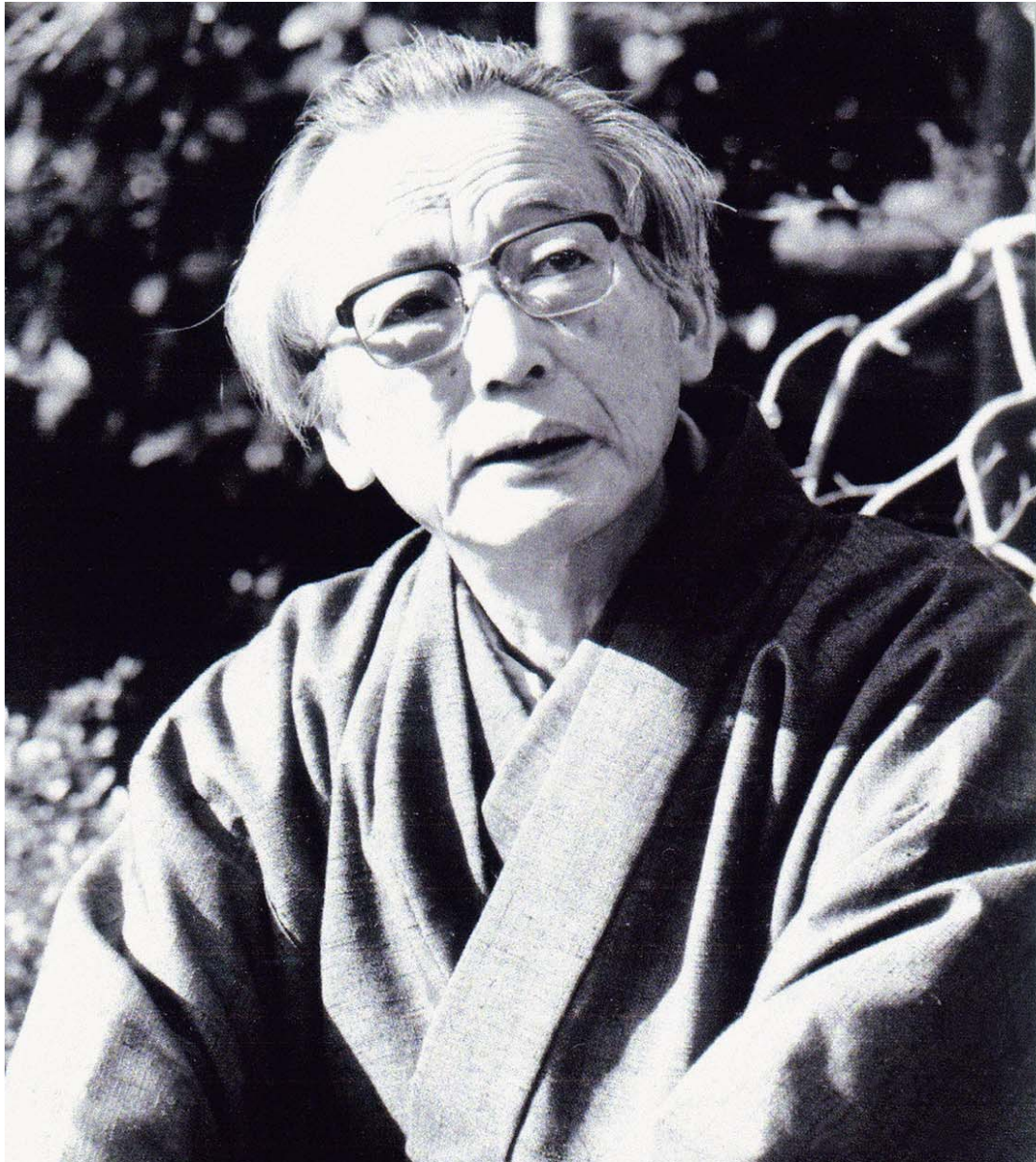
平成 22 年 (2010) 山梨県立文学館常設展示室に飯田蛇笏・龍太記念室が開館。

平成 29 年 (2017) には蛇笏が句会などで使っていた俳諧堂が復元された。

主な句集に『山廬集』『山響集』などがある。

蛇笏の代表句

芋の露連山影を正うす



(飯田秀實氏蔵)

父飯田蛇笏の後を継ぎ俳誌『雲母』を主宰

飯 田 龍 太

いいだ りゅうた

大正9年(1920)山梨県東八代郡境川村小黑坂(現笛吹市境川町)に飯田蛇笏の四男として生まれる。

昭和26年(1951)山梨県立図書館に司書として勤務。昭和29年(1954)に山梨県立図書館を退職し、『雲母』編集に専念する。

昭和37年(1962)飯田蛇笏が亡くなり、『雲母』の主宰を継承し、昭和40年(1965)には東京で第一回『雲母』全国大会を開催した。

昭和56年(1981)に日本芸術院賞恩賜賞を受賞し、同年4月より3年間NHKテレビ『俳句入門』に出演。

昭和58年(1983)には紫綬褒章を受章し、昭和59年(1984)には日本芸術院会員となる。

平成4年(1992)に『雲母』を900号で終刊し、甲府市で『雲母』全国大会を開催する。

平成19年(2007)86歳で没する。

平成20年(2008)に山梨県立文学館で『飯田龍太展』が開催され、平成22年(2010)山梨県立文学館常設展示室に飯田蛇笏・龍太記念室が開館した。

平成29年(2017)には父蛇笏が句会などで使っていた俳諧堂が復元された。主な句集に『百戸の谿』『山の木』などがある。

龍太の代表句

水澄みて四方に閑ある甲斐の国



(大久保千春氏蔵)

人生は野割り 日本初の耳鼻咽喉科女性医師

大久保 松 代

おおくぼ まつよ

明治 31 年 (1898) 山梨県東八代郡桂林村大坪 (現笛吹市境川町) に生まれる。

幼い頃からまだ誰も足跡をつけていない雪原に踏み入る「野割り」が好きだったという。

大正 2 年 (1913) 医療に従事するため東京に出て、開業医の叔父の下で働きながら看護師資格を取得。大正 9 年 (1920) には医師を目指して東京女子医学専門学校 (現東京女子医科大学) に進学。27 歳の春、卒業と同時に医師の資格を取得し男女を問わずまだ多くの医師が踏み込んでいない耳鼻咽喉科の道を選ぶ。東京帝国大学 (現東京大学) 医学部耳鼻科医局で、日本の耳鼻咽喉科の草分けとなった岡田和一郎教授に師事。医局唯一の女性研究者として励み、教授がドイツで習得した鼻中隔矯正の「ポケット手術」技術を局内でただ一人伝授される。研究の傍ら自宅に内科医院を開業し夜間診療を行なう。

昭和 9 年 (1934) 日本初の耳鼻咽喉科女性医師として「大久保耳鼻咽喉科医院」を正式に開業し、研究生活に区切りをつける。

喜寿を迎えて勇退するまでに診療した患者の数は 100 万人ともいわれ、看護師時代を含め医療に従事した年数は 60 年以上にもなる。

平成 6 年 (1994) 96 歳で没し、野割り人生の幕を下ろす。



(春日居郷土館・小川正子記念館蔵)

ハンセン病患者救済に生涯をささげた女性医師

小川正子

おがわ まさこ

明治 35 年 (1902) 山梨県東山梨郡春日居村桑戸 (現笛吹市春日居町) に生まれる。

大正 13 年 (1924)、医師を目指して東京女子医学専門学校 (現東京女子医科大学) に進学。在学中にハンセン病の施設^{ぜんせい}全生病院等を見学した。

大学卒業後、都内の病院で勤務した後、昭和 7 年 (1932) より国立ハンセン病療養所第 1 号の長島愛生園に勤務。勤務中には九州・四国等に検診に訪れている。昭和 12 年 (1937) に結核にかかり、愛生園で療養生活を送る。療養中にそれまで書いていた手記をまとめ、『小島の春』として出版、ベストセラーになる。昭和 14 年 (1939) に愛生園を退職し、桑戸に帰る。帰郷後の昭和 15 年 (1940) には映画『小島の春』が公開。

昭和 18 年 (1943) 42 歳で没し、桑戸の佛念寺に眠る。墓石の裏面には大切にしていた言葉「生きていく日に愛と正義の十字路に立たば必ず愛の道に就け」と刻まれている。

平成 3 年 (1991) に春日居郷土館・小川正子記念館が開館。小川正子直筆の手紙や日誌などを展示されている。



(風間純哉氏蔵)

笛吹川河川改修工事及び災害復旧に尽力

風 間 義 甫

かぎま よしすけ

明治 16 年 (1883) 山梨県東八代郡石和村市部 (現笛吹市石和町) に生まれる。

明治 40 年 (1907) の大洪水により砂礫と泥に覆われた旧石和町の災害復旧に立ち上がる。単なる復旧工事ではなく根本的な改修工事の必要が説かれ、特に被害の大きかった石和周辺の鵜飼川・笛吹川の大改修は切実だった。明治 42 年 (1909) 山梨県より災害復旧河川改修工事を受注し、明治 43 年 (1910) 建設業を興す。

明治 43 年笛吹川の流路変更に伴う河川改修終了後、旧笛吹川は延長 12 km、120ha の広大な廢河川敷となり、大正 15 年 (1926) から小松導平^{あたる}を中心として始まる笛吹川廢河川の開拓事業に貢献した。

昭和 46 年 (1971) 88 歳で没する。

明治 43 年以来、52 年のながきにわたり河川工事及び橋梁工事を中心に自ら陣頭に立ち災害復旧に力を注ぎ、小松導平、小林中らとともに今日の石和の発展に尽力した功績は多大である。



(加藤弘毅氏蔵)

日本一桃源郷の礎を築いた桃栽培の先駆者

加藤 重春

かとう しげはる

明治 17 年 (1884) 山梨県東山梨郡春日居村桑戸 (現笛吹市春日居町) の三科家に生まれ、明治 35 年 (1902) から 7 年間アメリカで果樹栽培を研究。帰国後明治 41 年 (1908) 東八代郡一桜村末木 (現笛吹市一宮町) の加藤家の養子となる。

昭和初期の養蚕不況による農家の困窮を打開するため、アメリカにおいて習得した技術を生かし桜桃及び桃の栽培に着目。東京の青果市場で当時主産地であった岡山・神奈川・静岡等の桃を視て調査を重ね、興津の園芸試験場にて桃栽培の知識を習得し、昭和 5 年 (1930) に岡山県より岡山早生・白桃・大久保等の品種を導入し桃栽培に着手。血のにじむ努力の末に本格的な桃栽培に成功する。これが一宮町で桃栽培が農業経営の一環として取り入れられた最初であり、今日のような桃の主産地として発展して行く発端といわれる。こうして桃栽培は戦後驚異的な発展を遂げ、笛吹市は全国一の産地となった。

昭和 32 年 (1957) 73 歳で没し、日本一桃源郷の礎を築いた桃栽培の先駆者としての人生を終える。



((公財)北野生涯教育振興会蔵)

「人より一倍の努力をなす」をモットーに人間尊重の精神の人

北 野 隆 春

きたの たかはる

明治 24 年 (1891) 山梨県東八代郡藤壱村 (現笛吹市境川町) に生まれる。

東京に出て官吏になるという夢を諦め、「人より一倍の努力をなす」をモットーに実業の道を志し、裸一貫で大正 9 年 (1920) 「北野商会」を設立。国内の自動車電球の製造販売、さらに輸出に活路を求めた。「新しいものを追い求める人」で、世界周遊旅行にでかけ各国で見聞を深める。帰国後、先見性と行動力をもって電気業界で飛躍を遂げるため、19 世紀にアフリカ探検に大きな足跡を残し世界に光明を掲げたアメリカ人探検家スタンレーにちなみ、昭和 8 年 (1933) 商会を「スタンレー電気株式会社」に改名する。

人間尊重の精神の持ち主で、多くの人々に生涯学習の場と機会を提供するため、昭和 50 年 (1975) 私財を投じ「財団法人北野生涯教育振興会」を設立。昭和 56 年 (1981) に 90 歳で没する。財団は今もその意志を引き継ぎ活動している。



(小池唯則氏のレリーフ：青楓美術館所蔵)

津田青楓に魅せられて故郷に「青楓美術館」設立

小池 唯 則

こいけ ただのり

明治 36 年 (1903) 山梨県東八代郡相興村^{あいおき}上矢作^{やはさ} (現笛吹市一宮町) に生まれる。

教職を経て、昭和 29 年 (1954)、東京都練馬区に幼稚園を設立。

昭和 32 年 (1957)、54 歳にして東京都立工芸高等学校でデッサンや油彩画を学ぶ。

幼少期を過ごした故郷に美術館を建てて、子どもたちに本物の芸術に触れる機会を設けたいという長年の夢を実現するため、昭和 46 年 (1971)、吉井忠の紹介で初めて津田青楓の杉並区高井戸富士見ヶ丘のアトリエを訪ねる。これを契機に青楓の書画はもちろん人間性にも魅せられ作品の収集を始める。

昭和 47 年 (1972)、収集した作品に加え新たに青楓から寄贈を受けたコレクションをもとに故郷一宮町で美術館建設に着手。昭和 49 年 (1974) 10 月 23 日「青楓美術館」を開館。県内美術館のさきがけとなり、「ぶどう畑の中の小さな美術館」の愛称で親しまれる。

昭和 57 年 (1982) 79 歳で没する。後に美術館は、遺族により当時の一宮町に寄贈され公立となり、平成 16 年 (2004) から笛吹市青楓美術館となる。館玄関前の一隅には小池のレリーフと彼の愛した童謡「ふるさと」の楽譜が刻まれた石碑が建ち来館者を迎える。そこには「この里にゆかりありてもよるべなきは きたりてここで一ぶくされよ」とある。



(笛吹市蔵)

日本の戦後復興に尽力した「財界四天王」のひとり

小林 中

こばやし あたる

明治 32 年 (1899) 山梨県中巨摩郡源村 (現南アルプス市) の矢崎家に生まれ、明治 32 年 (1899) 母方の石和村小林家の養子となる。

大正 11 年 (1922) 早稲田大学を中退後、郷里に帰り石和銀行の取締役支配人に就き財界人としての道を歩み始める。投機的才能があり株の売買で銀行経営に手腕を発揮する。

昭和 4 年 (1929) 根津嘉一郎の勧めで上京。根津の設立した富国徴兵保険相互会社 (現富国生命) に入社し抜群の資金運営能力を発揮した。政財界から一目置かれる存在となり、戦後日本の再建・復興を金融面からテコ入れするため設立された「日本開発銀行」(現日本政策投資銀行) の初代総裁に就任する。その後アラビヤ石油設立、大蔵省財政制度審議会会長等数々の要職を歴任し、戦後日本の経済成長期の「財界四天王の一人」として、日本の経済発展をリードした。昭和 56 年 (1981) 82 歳で没する。

財界人として優れた手腕を発揮する一方、根津美術館開館にも尽力し理事長となる。地元山梨に対しては清里のキープ協会の法人化に尽力する。また昭和 29 年 (1954) には石和町にあった小林家跡地を町に寄贈し、現在の「笛吹市小林公園」として開放するなど文化面でも大いなる功績を残した。また、慶子夫人より寄贈された歴史あるひな飾りは、毎春八田家書院に飾られ、多くの来訪者の心を和ませてくれる。



(小松孝一郎氏蔵)

旧笛吹川廃河川跡の開拓に尽力し、石和温泉郷の礎を築く

小 松 導 平

こまつ どうへい

明治 11 年 (1878) 山梨県東八代郡御代咲村東新居 (現笛吹市一宮町) の早川家の三男として生まれる。早川家は日本地下鉄の父と言われる早川徳次の生家であり導平は徳次の直近の兄である。

明治 14 年 (1881) 東八代郡増田村大間田 (現笛吹市八代町) の村長小松権三郎の養子となる。自由奔放な性格で人の先頭に立って行動するタイプだったという。養父母とともに農業経営に従事していたが、明治 40 年 (1907) の大洪水が人生の転機となった。

大正 5 年 (1916) 笛吹川の流路変更により砂礫と泥のまま放置されていた広大な旧笛吹川河川敷が公用廃止され、払下げの対象となった廃河川跡の開拓に乗り出す。

大正 15 年 (1926) 笛吹川廃河川耕地整理組合を組織し、導平は組合長となり移住開墾従事者による 120 余町歩という広大な土地開発事業に着手した。これが今日の石和中心街発展の発端といえる。

この開発の資金の融資を続けたのは、元開発銀行総裁の小林中の石和銀行であった。

昭和 13 年 (1938) 60 歳で没する。



(八田節子氏蔵)

富士風穴に^{さん しゅ}蚕種貯蔵所設立 山梨の養蚕業に捧げた生涯

八 田 達 也

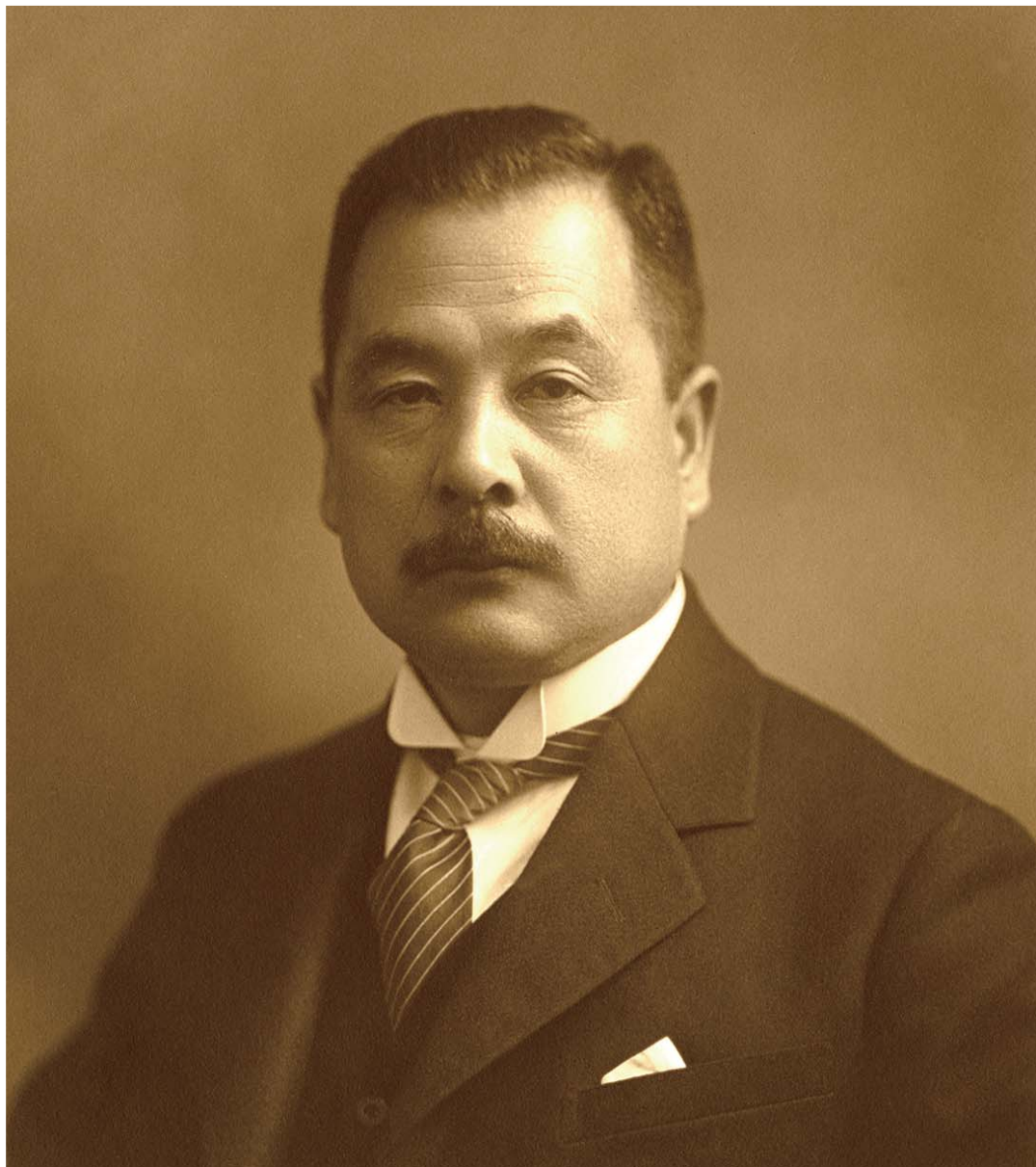
はった たつや

嘉永 7 年 (1854) 山梨郡歌田村 (現山梨市歌田) の志村家に生まれ、東八代郡八田村 (現石和町) の八田家の養子となる。

明治 9 年 (1876) 鶺鴒^{うかい}村の戸長となり、良質の生糸を得るには先ず良い蚕種が必要であると山梨県の養蚕技術の改良を志す。以来蚕種の改良を重ね、明治 10 年代後半にはその優秀性が認められ県内産蚕種の増産につながる。また明治 16 年 (1883) 以降、火力により飼育する「温度育成法」導入に取り組み県内の養蚕業発展を進める。さらに蚕を特定の季節に飼育できるよう蚕種を一定期間冷蔵するために富士風穴に着目する。特に富士風穴は気象条件が蚕種貯蔵に適していたことから、ここに日本有数の蚕種貯蔵所「八達館」が設立された。全国各地からの蚕種委託に応え、甲府から精進湖間の道路は蚕種運搬の人夫の列で賑ったという。

明治 19 年 (1886) これまでの研究成果と反省をまとめた『蚕事輯説』を著す。平易な文章で書かれていて、実際に養蚕に従事する人々の手引書となった。

「蚕業は我国の富盛を致し、万民の幸福を増すもの」を信念に、私財を投じて山梨の養蚕業に尽力した。大正 5 年 (1916) 62 歳で没し、八田の願念寺に眠る。



(早川史徳氏蔵)

山梨が生んだ日本の「地下鉄の父」

早川 徳次

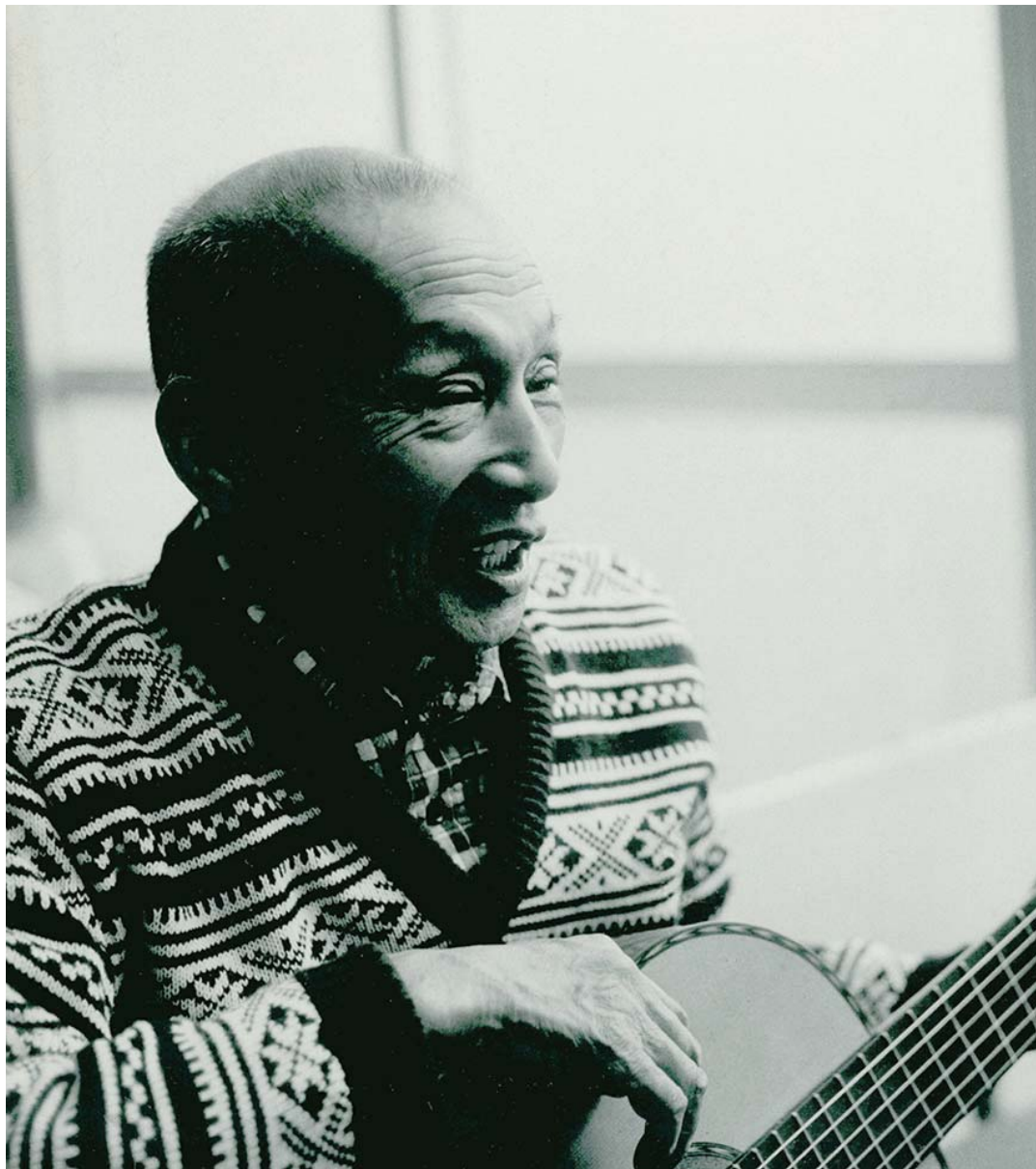
はやかわ のりつぐ

明治 14 年 (1881) 山梨県東八代郡御代咲村東新居 (現笛吹市一宮町) に生まれる。
大正 3 年 (1914) 渡欧の際ロンドンで地下鉄を目撃し、帰国後「必要な事は何時か必ず実現する。必要は不可能のことすら可能に変えて行く。」を信条に東京に地下鉄敷設を計画する。大正 6 年 (1917) 東京軽便地下鉄道 (後の東京地下鉄道株式会社) を設立し、昭和 2 年 (1927) 日本最初の地下鉄浅草・上野間 (現在の東京メトロ地下鉄銀座線の一部) を開通。その後昭和 9 年 (1934) には新橋まで延伸し「日本の地下鉄の父」と呼ばれている。

「いまに東京の地下は蜘蛛の巣の様に地下鉄が縦横に走る時代が必ず来る。また、そうでなければならない。」という有名な言葉を残し今日の東京の地下鉄網を予言したが、日本最初の地下鉄開業にとどまらず、ATSや自動改札のはしり、地下鉄ストアなど先見的アイデアに富み、地下鉄駅とデパートをドッキングさせた今日の地下鉄事業の基礎を作った。

社員に若い山梨県人を多く採用し、晩年後進の育成を目的に故郷の生家敷地に「青年道場」建設を計画する。講師陣を招き宿泊させるゲストハウスの建築途中に開戦のため完成間近で中断し、昭和 17 年 (1942) 61 歳で没する。そのため「青年道場」は幻となった。

ゲストハウスとして建てられた現存の建物は、近代和風建築の好例として平成 29 年 (2017) 3 月登録有形文化財として国に登録された。



(そば処「幟」 深澤寿美子氏蔵)

『^{なら やま ぶし}楯山節考』『笛吹川』の作者 「根っからの甲州人らしい」と評される

深 沢 七 郎

ふかさわ しちろう

大正3年(1914)山梨県東八代郡石和町市部(現笛吹市石和町)の印刷業を営む家に生まれる。大正15年(1926)上京し、職を転々としながらの生活と病弱な体質ゆえに長く病気を患い「世間から離れた人生」の青年時代を過ごしたことが後の作家としての下敷きとなる。一方ギターが得意でリサイタルを開けるほどの腕の持ち主であり、「^{ももはら せいじ}桃原清二」の名で演奏活動も行なっている。

昭和31年(1956)処女作『楯山節考』が「中央公論社新人賞」を受賞し、42歳で衝撃的な作家デビューを果たす。作品は翻訳され海外でも出版され人々に衝撃を与える。映画化もされ昭和58年(1983)カンヌ映画祭でグランプリを受賞した。『楯山節考』の2年後には故郷甲州を舞台にした最初の長編小説『笛吹川』を著し農民群像を鮮烈に描いた。

昭和40年(1965)埼玉県菖蒲町に自営の「ラブミー牧場」を開く。昭和46年(1971)東京の下町で今川焼き屋「夢屋」を、5年後草加市で焼きだんご屋を開業して話題となる。

晩年はラブミー牧場で自適の生活を送るが、寝たり起きたりの日々が多く、昭和62年(1987)73歳で没する。井伏鱒二に「根っからの甲州人らしい」と評された。



(富士急行株式会社蔵)

富士急行の前身富士山麓電気鉄道を興し、富士山の魅力を発信

堀内 良平

ほりうち りょうへい

明治3年(1870)八代郡上黒駒村新宿(現笛吹市御坂町)に生まれる。

幼少期から向学心旺盛で、13歳にして一家を支えながら苦学を重ね、明治32年(1899)29歳の若さで東八代郡会議員となり郡会議長にも当選。明治40年(1907)には山梨県議会議員に初当選。日蓮の説く「不惜身命」を信条とし、40代目前に東京に出て郷土の先輩である根津嘉一郎らと知り合い実業界に入ったのが人生の転換期となる。

日蓮宗の敬虔な信者であったことから、身延山久遠寺への参拝者の便に供するため富士身延鉄道(現JR身延線)を創設するなど身延開発に尽力する。大正7年(1918)東京に初のバス会社東京市街自動車株式会社(通称「青バス」)を創業。さらに富士北麓の開発に着手し、大正15年(1926)に富士急行の前身である富士山麓電気鉄道及び富士山麓土地株式会社を設立する。昭和4年(1929)大月・富士吉田間の電気鉄道を開通する。一方富士を望む景勝地である富士五湖畔の土地開発をはじめホテル・ゴルフ場、山中湖畔別荘地などの開発を進める。自然環境に配慮しながら開発しようとした堀内の経営理念である「富士を世界に拓く」は、その後の富士山麓一帯が日本有数の国際観光リゾート地として帰結する。昭和5年(1930)から衆議院議員を3期務め、昭和19年(1944)75歳で没する。



(前島登氏蔵)

『アラビアンナイト』を初めて原典から翻訳 イスラム研究の先駆者

前 嶋 信 次

まえじま しんじ

明治36年(1903)山梨県東八代郡北八代村(現笛吹市八代町)の元禄時代から続く漢方医の前島家に生まれる。

大正10年(1921)上京し、はじめ東京外国語学校(現東京外国語大学)で仏文学を、大正13年(1924)からは東京帝国大学(現東京大学)で東洋史学を学ぶ。駒込の東洋文庫に通い詰め中国文献と西アジア文献の研究に没頭するが、この学生時代の7年間の後の東西アジアの研究の第一人者で、イスラム文献翻訳者として大成する基礎固めとなった。昭和35年(1960)慶應義塾大学教授に就任し、昭和41年(1966)日本で初めてとなるアラビア語原典を用いた『アラビアンナイト』の翻訳に着手。12巻まで発刊したところで一旦中断し、原典には属さない『アリババと40人の盗賊』『アラジンと不思議なランプ』を翻訳すると再び原点に戻り続巻に取り掛かるも昭和58年(1983)腎不全のため急逝する。享年79歳であった。こうして広く世界の人々に愛されている珠玉の作品2編の翻訳が遺作となった。彼の没後、池田修により残りの13巻から18巻までが引継がれ、『アラビアンナイト』は完結した。



(吉岡順一氏蔵)

日本住血吸虫病(地方病)の撲滅に尽力した医師

吉岡 順作

よしおか じゅんさく

元治元年(1864)山梨郡徳条村(現笛吹市春日居町)の開業医吉岡應治の長男として生まれる。

明治14年(1881)徽典館(現山梨大学)の医学科に入り、次いで明治17年(1884)東京で難関の医術開業前期試験、明治20年(1887)同後期試験に合格し、医師開業免許を取得する。翌年故郷徳条で医師を開業し、祖父西斎・父應治とともに三代の医師一家となった。

開業後間もなく石和村(現笛吹市石和町)に新たに吉岡医院を開業。後に甲府市富士川町に移転し診療と研究を行なった。

順作の業績は多々あるが、特筆すべきは地方病撲滅に尽力したことである。明治30年(1897)原因不明とされた水腫脹満すいしゅちやうまんの患者の死後解剖を行い、約13年を経た明治43年(1900)に「地方病予防法の予報」と題した研究業績を発表した。これにより日本住血吸虫の中間宿主である宮入貝を駆除することが地方病予防に繋がり地方病撲滅の端緒となる。

昭和17年(1942)80歳近くの高齢となったのを機に医師を廃業。昭和19年(1944)80歳で没する。医療と地方病研究、それに保健衛生等人々の生命尊重に献身した功績は多大である。



(米山照夫氏蔵)

「武田節」「新甲州音頭」等を作詞

米 山 愛 紫

よねやま あいし

明治 39 年 (1906) に山梨県東八代郡下黒駒村 (現笛吹市御坂町) で生まれた。本名は直照。^{なおてる}
山梨師範学校 (現山梨大学) 卒業後、山梨県内・上海などで小学校教員を務めながら詩や童謡を書きつづけ、『赤い鳥』・『子どもの国』などの同人、北原白秋の門下生となった。

昭和 16 年 (1941) に朝日新聞社募集の国民学校の歌で一等になり、文部大臣賞を受賞。昭和 17 年 (1942) には『春の停車場』、昭和 18 年 (1943) には『大陸と子供と兵隊』と童話・童謡集を出版。

昭和 48 年 (1973) 67 歳で没する。

主な作品は民謡・校歌・社歌等で「武田節」、「新甲州音頭」、市内の「石和南小学校校歌」、「石和東小学校校歌」、「富士見小学校校歌」、「御坂西小学校校歌」、「御坂東小学校校歌」、「御坂中学校校歌」、「旧坂下中学校生徒会歌 (現春日居中学校)」、「旧園芸高等学校校歌 (現笛吹高等学校)」がある。特に「武田節」は新民謡であるが山梨県を代表する民謡として親しまれている。

笛吹市ふるさとの偉人

平成29年3月発行

〈編集・発行〉

笛吹市教育委員会
笛吹市偉人選考委員会

〒406-0031 山梨県笛吹市石和町市部809-1
笛吹市役所 市民窓口館
TEL055-262-4111(代)



FUEFUKI CITY

山梨県
笛吹市